

Title	人間福祉学科 3 年生の大学生活と意識
Author(s)	古谷野, 亘
Citation	聖学院大学論叢,18(2) : 223-230
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=111
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人間福祉学科 3 年生の大学生活と意識

古 谷 野 亘

Campus Life and Attitudes of Third Year Students in the Department of Human Welfare

Wataru KOYANO

The campus lives and attitudes of third year students in the Department of Human Welfare, Seigakuin University, were studied. 113 students responded to a questionnaire survey conducted in January 2005. The response rate was 86.9%. Factor and cluster analyses yielded three types of students: Study-oriented, Job-oriented, and Friendship-oriented; 18.6% of the respondents were classified as Study-oriented, 53.1% were Job-oriented, and 28.3% were Friendship-oriented, respectively. The students classified as Study-oriented were likely to attend classes regularly and were well-satisfied with their campus lives, but less likely to properly prepare for employment after graduation. The Job-oriented were students properly facing up to preparation for employment after graduation. The Friendship-oriented students were apt to constantly chatter and to use their mobile phones in the classroom, and were less satisfied with their campus lives.

Key words: University Students, Campus Life, Typology, Seigakuin University

・ 調査の目的

大学生の質の低下が指摘されるようになって久しい。学力の低下以前に、学業への意欲と適性を欠く「学生」の増加によって、授業中の私語や携帯電話、遅刻・退席等が横行し、授業が成り立たない“教室崩壊”さえ生じていると言われている。しかし、“教室崩壊”が広汎に生じているところであっても、すべての学生が“教室崩壊”に寄与しているわけではない。いくつかのタイプの学生が混在し、あるタイプの学生が一定割合を超えたときに収拾のつかない事態が生じるのである。

開設後 7 年を経た聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科に“教室崩壊”はない。しかし、在籍する学生のなかにいくつかのタイプがあって、学業への意欲や適性を欠く者が存在していることも否定しがたい事実である。

本調査は、人間福祉学科の 3 年生について、学生生活と意識からの類型化を行い、類型ごとの頻度と特性を把握することを目的として実施された。

．方 法

2005年 1 月に人間福祉学科の 3 年次に在籍する全学生を対象として、集合調査法による調査を実施した。3 年次の必修科目「専門演習」の時間に担当教員がそれぞれのクラスで調査票を配布し、その場で記入させたのち回収した。同月の在籍者 130 名のうち 113 名が回答し、回収率は 86.9% であった。

調査票には、回答者の基本属性のほか、現在の生活と意識、満足度に関する質問がもりこまれた。生活と意識に関する質問は 25 項目（表 4 上部参照）にわたり、回答選択肢は「その通り」「まあその通り」「あまりそうではない」「そうではない」の 4 段階であった。分析に際してはこれを肯定的な回答（「その通り」「まあその通り」と否定的な回答（「あまりそうではない」「そうではない」）の 2 値に再コードした。満足度に関する質問項目は「いまの学生生活に満足している」と「人間福祉学科に入ってよかったと思う」の 2 項目で、回答選択肢はいずれも 4 段階であったが、分析に際しては肯定的な回答（「満足」「どちらかという満足」および「そう思う」「まあそう思う」と否定的な回答（「どちらかという不満」「不満」および「あまりそう思わない」「まったく思わない」）の 2 値にそれぞれ再コードした。

回答者の類型化は因子分析とクラスター分析によった。最初に生活と意識に関する質問項目のうち特徴的な 6 項目（表 1 参照）を選んで因子分析を行い、因子得点を算出した。次いで因子得点を用いてクラスター分析を行い、クラスターを析出した。因子の抽出は主成分法、因子軸の回転はバリマックス法、因子得点の算出は回帰法によった。クラスター分析は k 平均法によって行い、最適解を得たときの因子数を k 値とした。

析出したクラスターと他の質問項目とのクロス集計を行って、クラスター別に回答者の特性を把握した。なお、本調査は悉皆調査であることから、統計的検定は一切行わなかった。

．結 果

(1) クラスターの析出

因子分析では、抽出する因子数を 2 から 6 に至るまで試行し、いずれも解を得たが、最適解を得たのは因子数を 3 にしたときであった。表 1 は、因子数を 3 としたときの回転後因子負荷量である。因子負荷行列は単純構造をなし、累積因子寄与率は 66.9% であった。第 1 因子は質問項目「授業には休まず出席している」と「授業には必ずテキストを持ってくる」にのみ大きな因子負荷をもち、第

表1 回転後因子負荷量

	勉強志向 因子	就職志向 因子	友人関係 志向因子	共通性
授業には休まず出席している	.839	.045	-.019	.707
授業には必ずテキストを持ってくる	.816	-.021	.053	.669
就職先の業種を決めている	-.073	.824	.072	.690
実現したい目標がある	.100	.817	-.099	.688
授業中に携帯メールをすることが多い	-.189	-.129	.784	.667
大学に来るのは友人と話すためである	.235	.103	.726	.593
因子寄与	1.477	1.377	1.160	4.014
因子寄与率	.246	.230	.193	.669

2因子は「就職先の業種を決めている」と「実現したい目標がある」に、第3因子は「授業中に携帯メールをすることが多い」と「大学に来るのは友人と話すためである」に大きな因子負荷をもった。このことから、第1因子は「勉強志向因子」、第2因子は「就職志向因子」、第3因子は「友人関係志向因子」と命名された。

k値を3とするk平均クラスター分析によって得られたクラスターの中心(因子得点の平均値)は表2の通りであった。いずれのクラスターも、1つの因子得点の平均値のみが正で、他の2つの因子得点の平均値は負であった。このことから、「勉強志向因子」の因子得点平均値のみが正のクラスターは「勉強中心型」、「就職志向因子」の因子得点平均値のみが正のクラスターは「就職志向型」、「友人関係志向因子」の因子得点平均値のみが正のクラスターは「友人関係重視型」とそれぞれ命名された。

表2 クラスターの中心

	勉強志向 因子	就職志向 因子	友人関係 志向因子
勉強中心型 (21)	0.774	-1.232	-0.513
就職志向型 (60)	-0.140	0.590	-0.486
友人関係重視型 (32)	-0.245	-0.297	1.248
全体	0.000	0.000	0.000

注：数値は因子得点の平均値。()内はケース数。

回答者113名のうち21名(18.6%)は「勉強中心型」、60名(53.1%)は「就職志向型」、32名(28.3%)は「友人関係重視型」であった。「勉強中心型」は女性に多く、「就職志向型」は男性に多かったが、「友人関係重視型」の頻度には性差がなかった(表3)。合格した入試の種類と受験時の志望順位はクラスターの出現頻度に関連していなかったが、受験時に現役高校生であった者では「友人関係重視型」がやや多かった。

表3 属性別にみたクラスターの分布

(%)

		勉強中心型	就職志向型	友人関係重視型	計	Cramer の V
全体		18.6	53.1	28.3	100.0 (113)	-
性別	女性	25.0	45.3	29.7	100.0 (64)	.211
	男性	10.2	63.3	26.5	100.0 (49)	
入試種別	一般	15.6	55.6	28.9	100.0 (45)	.088
	推薦	17.5	50.0	32.5	100.0 (40)	
	その他	25.0	53.6	21.4	100.0 (28)	
現浪別	現役	17.9	50.5	31.6	100.0 (95)	.165
	現役以外	17.6	70.6	11.8	100.0 (17)	
志望順位	第一志望	20.3	50.0	29.7	100.0 (74)	.088
	第一志望以外	15.4	59.0	25.6	100.0 (39)	

注:()内はケース数。

(2) クラスター別にみた生活と意識

回答者の7割は週に5日以上大学に来ており,9割の回答者には大学に気の合う友人がいた。これらの頻度にクラスターによる差はなかった(表4)。しかし,「友人関係重視型」の多く(84.4%)にとって大学に来るのは友人と話すためであった。それゆえ,授業中に私語をせずにはいられない者(40.6%)が他のクラスターより多く,ほぼ全員(96.9%)が授業中に携帯メールをすることが多いとしていた。ただし,授業中に携帯電話で通話する者は1割であって,他のクラスターと異ならなかった。

また「友人関係重視型」では,授業中に寝ていることが多い者(50.0%)や授業に遅刻することが多い者(40.6%),ふだんの授業よりアルバイトの方を優先する者(28.1%)が他のクラスターより多かった。さらに,週に4日以上アルバイトをしている者(62.5%)も多かった。取得予定の資格がある者(45.2%)は他のクラスターより少なく,「楽勝科目」を選んで履修している者(41.9%)が多かった。しかし,それにもかかわらず,試験前にいつも他人のノートのコピーをとっている者(46.9%)が多かった。

他方「勉強中心型」では,授業に休まず出席している者(95.2%),授業には必ずテキストを持ってくる者(85.7%),教室ではいつも前の方に座る者(47.6%)が他のクラスターより多かった。反対に,授業に遅刻することが多い者(14.3%),授業中に寝ていることが多い者(19.0%),楽勝科目を選んで履修している者(15.8%),試験前にいつも他人のノートのコピーをとっている者(4.8%)は少なかった。しかし,成績がよい方だと思ふ者の頻度は他のクラスターとかわらず,就職先の業種を決めている者はわずか9.5%のみであった。

「勉強中心型」とは対照的に,「就職志向型」では95.0%の者が就職先の業種を決めていた。実現したい目標がある者(93.3%),新聞(スポーツ新聞を除く)を読んでいる者(36.7%)は他のクラ

表4 クラスター別にみた生活と意識，満足度

(%)

	勉強 中心型	就職 志向型	友人関係 重視型	全体	Cramer の V
教室ではいつも前の方に座る	47.6	31.7	12.5	29.2	.265
授業には休まず出席している ^{a)}	95.2	58.3	59.4	65.5	.299
授業に遅刻することが多い	14.3	37.3	40.6	33.9	.202
成績はよい方だと思う	23.8	38.3	28.1	32.7	.130
楽勝科目を選んで履修している	15.8	31.7	41.9	31.8	.184
シラバスを調べてから履修している	47.6	57.6	56.3	55.4	.076
授業中に携帯メールをすることが多い ^{a)}	14.3	16.7	96.9	38.9	.747
授業中に私語をせずにはいられない	14.3	8.3	40.6	18.6	.361
授業中に寝ていることが多い	19.0	33.3	50.0	35.4	.222
授業には必ずテキストを持ってくる ^{a)}	85.7	58.3	53.1	61.9	.238
授業中でもケータイに出る	10.0	3.3	12.5	7.1	.162
ふだんの授業よりアルバイトの方を優先する	4.8	5.1	28.1	11.6	.326
就職ガイダンスには必ず出席している	57.1	58.3	43.8	54.0	.129
就職のための活動を始めた	57.1	55.0	46.9	53.1	.080
「就職活動」という言葉がイヤになってきた	52.4	50.0	56.3	52.2	.054
新聞(スポーツ新聞を除く)を読んでいる	23.8	36.7	15.6	28.3	.206
実現したい目標がある ^{a)}	42.9	93.3	56.3	73.5	.490
就職先の業種を決めている ^{a)}	9.5	95.0	65.6	70.8	.701
大学の行事には必ず参加している	28.6	28.3	21.9	26.5	.067
クラブ・サークルを休んだことがない	31.6	21.4	16.1	21.7	.125
大学に来るのはクラブ・サークルのためである	5.6	13.6	6.5	10.2	.123
大学に来るのは友人と話すためである ^{a)}	42.9	33.3	84.4	49.6	.443
大学に気の合う友人がいる	100.0	91.7	93.8	93.8	.128
試験勉強を友人と一緒にすることが多い	38.1	16.7	34.4	25.7	.221
試験前にはいつもノートのコピーを取っている	4.8	26.7	46.9	28.3	.316
学期中、週に5日以上大学に来る	71.4	71.7	71.9	71.7	.003
学期中、週に4日以上アルバイトをしている	35.0	41.7	62.5	46.4	.210
学期中、週に1日以上クラブ・サークルの活動に参加する	45.0	35.7	31.0	36.2	.098
取得する予定の資格がある	66.7	69.0	45.2	61.8	.215
社会福祉士・精神保健福祉士	52.4	50.0	32.3	45.5	.167
福祉科教員免許	28.6	12.1	16.1	16.4	.167
司書	23.8	1.7	0.0	5.5	.394
認定心理士	4.8	17.2	6.5	11.8	.178
いまの学生生活に満足している	76.2	73.3	56.3	69.0	.175
人間福祉学科に入ってよかったと思う	90.5	83.3	75.0	82.3	.113

a) 因子分析に用いた変数。

スターより多かった。しかし、就職ガイダンスに必ず出席している者、就職のための活動（自己分析、企業研究、会社訪問等）を始めた者、「就職活動」という言葉がイヤになってきた者の頻度は他のクラスターと異ならなかった。

回答者の69.0%は現在の学生生活に満足しており、82.3%は人間福祉学科に入ってよかったと思っていた。現在の学生生活に満足している者、人間福祉学科に入ってよかったと思う者の頻度に性差はなかった。受験時に人間福祉学科が第一志望であった者では、そうでなかった者に比べて、人間福祉学科に入ってよかったと思う者(90.5%)が多く、現在の学生生活に満足している者(74.3%)もやや多かった(表5)。また、推薦入試で入学した者では、現在の学生生活に満足している者(80.0%)がやや多かった(表6)。「友人関係重視型」では、現在の生活に満足している者(56.3%)、人間福祉学科に入ってよかったと思う者の頻度(75.0%)が、他のクラスターよりやや低かった(表4最下部)。

表5 受験時の志望順位別にみた満足度

	(%)			
	第一志望	第一志望 以外	全体	Cramer のV
いまの学生生活に満足している	74.3	59.0	69.0	.158
人間福祉学科に入ってよかったと思う	90.5	66.7	82.3	.297

表6 入試の種類別にみた満足度

	(%)				
	一般	推薦	その他	全体	Cramer のV
いまの学生生活に満足している	60.0	80.0	67.9	69.0	.188
人間福祉学科に入ってよかったと思う	75.6	85.0	89.3	82.3	.150
現役だった	71.1	100.0	85.2	84.8	.350
人間福祉学科が第一志望だった	28.9	95.0	82.1	65.5	.635

・ 考 察

本調査の回収率は高く、項目欠測率も非常に低かったので、調査結果は人間福祉学科3年生の実態を的確に反映しているものと考えられる。因子分析の結果はきわめて明瞭で、明瞭に識別される3つのクラスターが析出された。3つのクラスターの存在は、人間福祉学科3年生のなかに3つのタイプの学生が存在していることを示している。

授業中の私語と携帯メール、遅刻・欠席、授業よりアルバイトを優先することなど学生の質の低下として指摘される行動傾向を顕著に示しているのは、「友人関係志向型」の学生である。他のタイプの学生と同様にほぼ毎日大学に来ている者が多いが、彼(女)らにとって「大学に来るのは友人

と話すため」であり、学業ではない。登校日数が多いのは授業への出席が強要されているからであって、その当然の帰結が授業中の私語と携帯メール、居眠りである。現在の学生生活に満足している者は、他のタイプに比べて少ない。このような「友人関係志向型」の学生が増加し、彼（女）らにとって苦痛でしかない授業への出席が強要され続けるならば、彼（女）らの行動は“教室崩壊”を招き、他の学生の勉学を妨げることになるであろう。「友人関係志向型」の学生は、調査実施時の人間福祉学科3年生の約3割を占めているが、幸いなことに未だ多数派にはなっていない。

全体の半数を占める「就職志向型」は、就職先の業種を決めている者、実現したい目標のある者が大多数を占めていることから命名された。しかし、就職のための活動を始めた者や就職ガイダンスに必ず出席している者が他のタイプの学生より特に多いわけではなく、半数の者はすでに「就職活動」という言葉がイヤになってきていた。したがって、このタイプの学生が就職活動に特に熱心な者たちであると考えるのは適当でない。「就職志向型」の「就職」は、就職という事柄そのものであるよりは、調査に回答した学生が直面している最大の課題を表していると考えた方がよいであろう。調査の実施時期は3年次の終わりであったから、学生は卒業後の進路を考え、ある程度具体的に行動していなければならない時期にあたる。そのような当面の課題に取り組み、達成しつつある学生が「就職志向型」に分類されているのである。その意味では、「就職志向型」の学生は、現実の問題に向き合い、適切に対処できている学生であると言ってよい。全体として人間福祉学科の学生に“良さ”があるとすれば、それは「就職志向型」の学生が多いことによるのかもしれない。

「勉強中心型」の学生は、授業には休まずテキストを持って出席し、教室では進んで前の方に座ることが多い。このタイプの学生が多ければ、授業はやりやすい。また、現在の学生生活への満足度も高く、人間福祉学科に入ってよかったと思っている。その意味で理想的な学生であるように思われがちであるが、自分で成績がよい方だと思える者は少なく、実際に成績優秀であるとは限らない。むしろ、3年次の終わりになってほとんど全員が就職先の業種を決めていないことに注意が向けられるべきである。このタイプの学生には、著しく学習能力の劣る者、当面の課題から目をそらしている者、あるいは単に“遅れている”だけの者が多く含まれているかもしれないからである。

推薦入試の受験資格は専願の現役高校生に限定されているので、推薦入試で入学した学生には人間福祉学科を第一志望としていた者が多く（表6下部参照）、現在の学生生活に満足している者もやや多い傾向がある。その意味では、推薦入試の比率を高めるという入試戦略は妥当なものであったということができる。しかし同時に、推薦入試の比率を高めることは、受験時に現役高校生であった者に多い「友人関係重視型」を増し、「就職志向型」を減少させる可能性もある。現実の課題に向き合い、適切に対処できる「就職志向型」を増し、「友人関係重視型」を多数派にしないためには、入学者の多様性を確保することも入試戦略として重要であると考えられる。

付記 調査の実施にご協力いただいた教員各位に御礼申し上げます。なお、使用した調査票は選択科

人間福祉学科 3 年生の大学生活と意識

目「社会調査法」の実習として作成されたものである。